

# ギターのニューフェイス

The New Face of Classical Guitar

①

## ヤロスラフ・マッハ

Jaroslav Mach 2018  
(Czech Republic)

写真：木田新一

文：中里精一（本誌編集部）



本号よりギター紹介の頁として、日本ではまだまだあまりよ知られていない、ニューフェイスのギターを取り上げていく。今回はチェコのヤロスラフ・マッハ。マッハというと音速を連想するが、それもエルンスト・マッハというオーストリアの学者に由来するそうだ。

ラベルには Holland の文字が見えるが、ヤロスラフ・マッハはチェコの人である。1950年にチェコ(当時はチェコスロヴァキア)に生まれ、1968年からオランダに移住。1975年から独学でギター製作を開始したが、1989年にこれを中止、別な職業に就いた。2012年に祖国チェコに戻り、かつてのユーザーの要望によりギター製作を再開して現在に至る。

彼のウェブサイトを見ると、クラシックギター以外にモダン OM (マーティンのオーケストラ・モデル) つまり鉄弦のフォークギター、ナイロンの10弦ギターがラインナップされている。ナイロン弦、鉄弦のギターの双方の製作上のノウハウが生かされているようで、ボディーの丸味を帯びた形も共通している (モダン OM はボディーとネックのジョイントが14フレットのため、





上部がややつぶれたように見える)。

さらにウェブサイトの別のページには SITES (Convention on International Trade in Endangered Species of Wild Fauna and Flora、日本語では絶滅のおそれのある野生動植物の種の国際取引に関する条約、略して“ワシントン条約”)に関する一文があり、採取が規制されているローズウッド種の使用を避けていることを明示している。いわゆるハカラダ (ブラジリアン・ローズウッド) はもとよりインディアン・ローズウッド、中南米ローズウッドなどの代わりに、アフリカ産のウェンジを使用している。音もハカラダ仕様のギターに似ているという。細い縞目を成す木目が特徴な硬く重い木材である。

こうした新しい方向性と裏腹に、彼は流行のダブルトップやラティス・ブレイシングには否定的である。音量の過度な追求は音色を損ねるといふ。上の表面板透過写真を見ると分かる通り、彼の力木構造は9本の扇形で、これは古いイグナシオ・フレタから採用したという。表面板には米杉 (レッド・シーダー) を使わずスプルーに限定のも、トラディショナルな一面であろう。

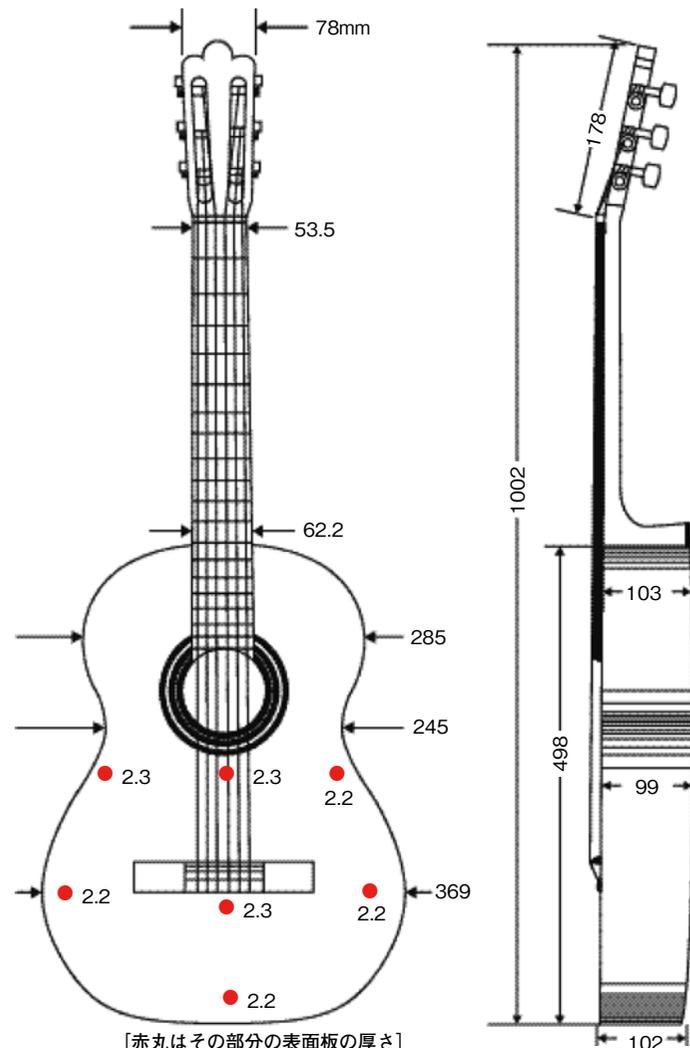
弦について、彼はカーボン弦よりもナイロン弦の使用を勧めている。テンションはノーマルが適しているが、



ハード・テンションも音を明るくするのに向いているとのこと。糸巻はスイスのシェートラー Schertler 社の単体を使用。日本ではあまり見られないが、彫刻のない楕円のプレート、ギア比は18:1、ツマミは黒檀、ローラーは黒色。使用感はスムーズで高級感がある。

さて、肝心のマッハ・ギターの音である。まずボリュームが豊かで、音色はクリアで淀みがない。スペイン系というよりはドイツ系の音色と言えようか。写真のギターは注文主の「よりダイレクトで大きな音を」という要求に応じて表面板にシトカ・スプルース（フォーク系のギターによく使われる）を採用し、横板は二重になっている。経済的な事情があってこのギターは注文主の手に渡らなかったという。通常は表面板に30年以上寝かせたオーストリアのスプルースを使い、横板も単板とのことで、より軽く、その音はより伝統的なものに近いであろうと思われる。

(<http://www.machguitars.com/>  
楽器提供：ギターショップ カリス)



サイズ	
重量	2100g
弦長	650mm
弦幅 (上)	43mm
弦幅 (下)	60mm
サウンドホール径	φ 88mm
ブリッジ	30 × 190 × 9.5mm
ネック厚 (上)	22mm
ネック厚 (下) 9F	25.2mm
材料	
表板	シトカ・スプルース
裏・横板	ウエンジ
ネック	マホガニー
指板	黒檀
ブリッジ	ウエンジ
塗装	ラッカー
糸巻	シェートラー